

古の昔、

カニエがすべてであり

鋼の教えと

闇を司る魔が支配する

セテギネアと呼ばれる

時代があった。

手を取らなさい

おれだけがあなたの目

AUTHOR: Kagami Yamata
ILLUSTRATION: Kamei

古の昔、

カニエがすべてであり

鋼の教えと

闇を司る魔が支配する

ゼテギネアと呼ばれる

時代があった。

手を取りなせしこ

花は花びらがあなたを待てる

AUTHOR: Kagami Yamata

ILLUSTRATION: Kamei

■神竜騎士団、破れる！

「ゴリアテの若き英雄」デニム・パウエル氏が率いるヴァレリア解放軍は、ローデイス教国の暗黒騎士団・ロスローリアンが駐留するバージニア城を襲撃した。

これはドルガルア王の忘れ形見たるベルサリア・オヴェリス王女の「救出」を目的としたものと言われていた。

だが、バージニア城で迎え撃ったのはベルサリア王女その人であり、神竜騎士団の大義は失われてしまった。

更にベルサリア王女は、ローデイス教国との同盟を示唆し、ロスローリアンは同盟に力を貸す存在であると告げられたという。

この戦いで、パウエル氏は消息不明となり、彼を中心とした神竜騎士団もまたちりぢりになって再起を伺っているという。

■ベルサリア王女、神竜騎士団を国賊に

王都ハイムにて、ドルガルア王の忘れ形見・ベルサリア・オヴェリス王女は会見した。

内乱による爪痕を一つ一つ見て回り、特にバルマムツサでは「来るべき新時代のために必要な入植」として、ガルガスタン人、ウォルスタ人、バクラム人が1対1対1となるような構成で、自ら市民を選抜してみせる。

また「バルマムツサの虐殺」の首謀者であるデニム・パウエルを始めとする、神竜騎士団を国賊として、弱体化しているヴァレリア解放軍に対し、騎士団の身柄全員の引き渡しを要請した。

以下はベルサリア王女の演説から——ウォルスタ、ガルガスタン、そしてバクラム、互いの憎しみを超える必要があります。それをこのバルマムツサの街

再建から行うべきです。この街を滅ぼした張本人、そしてそれを首魁とする神竜騎士団は私、そして今は亡き父・ドルガルア王の理念を阻む国賊そのものです。彼らを排除して始めて理念は現実になります。

■王都ハイム、ベルサリア女王戴冠式

万歳！ 我らのベルサリア女王万歳！

王都ハイムは、ウォルスタ、ガルガスタン、バクラムの人々で埋め尽くされております。

ベルサリア・オヴェリス王女が、正式に貞応として戴冠する運びとなりました。

この喜ばしい日を、ドルガルア王も草葉の陰でお喜びになつてのことでしょう！

これにより、ドルガルア王ご逝去から混乱の続いていたウォルスタは再び、多民族統一の理想を掲げた国家として再建することになります。

ベルサリア女王がヴァレリア王国を後継したことにより、暫定的に成立していたバクラム・ヴァレリア王国は解消。ベルサリア女王の旗の下に集うことを決めました。

これを受けて、バクラム・ヴァレリア王国を支援していたローデイス教国は、ベルサリア女王に対し、対等な同盟関係への発展を願うという親書を渡し、軍事顧問として引き続き騎士団ロスローリアンの派遣を継続するとも告げました。

戴冠して間もないベルサリア女王ですが亡きドルゴドア王にも劣らない見事なカリスマ性を発揮しております。

我らヴァレリア王国に、ファイラーハの加護があらんことを！

——以上、ウォーレン・レポートより。



戴冠式を終え、見事な国民向けの演説を行ったベルサリア・オヴェリス女王、ことカチュア・パウエルに眼帯を付けた暗そうな男が話しかける。

「見事でしたな、ベルサリア女王」

「……ランスロット・タルタロス」

「我らロスローリアンは本国の命により軍事顧問としてこのヴァレリア王国に駐在することになりました」

「そう……」

「まあ、そんなに長い時間ではありませんがね」

「それは結構ね」

「……しかし、さすが覇王ドルガルアの実子でした。私は、久々に武で目を見晴らせて貰いました」

「……」

「あの時、私を追いつめた『ゴリアテの英雄』の剣。それを払いのけ、あなたは逆に彼を攻めた」

「そう、だったかしら」

「確かに、彼はあなたの弟で、彼は姉であるあなたに手加減していたかも知れない。だが、だからといって私の評価が変わるわけではありませんよ」

「ふふふ……ロスローリアンのデステンブラーともあろう人が素人の女に助けられたことを声高に言うのは如何なものでしょう？」

「……私はこう見えても褒める者を褒めるのですよ。あなたの弟に謝罪したように」

「それは本心では無いでしょう？」

「……本心ではなくても、私はロスローリアンの団長にしてローデイス教国の外交使節、今では我らが教皇サルディアン陛下の舌でもあるのです。多少は真に受けてもらってもいいのですよ」

カチュアはそれには何も答えず黙ってランスロット・タルタロスを見送った。ヴァレリアの新時代は暗黒の臭気に満ちていた。

○

ドルガルア王の忘れ形見であるベルサリア女王に
関して周囲は様々な憶測を持っていた。

反ローデイスの機運を強く持つウォルスタでは特に
そうだった。

“ゴリアテの英雄”デニムへの傾倒もあり「ベルサ
リア女王はローデイスが作った偽物」というのが通
説だった。

だが真実を知るのはウォルスタ人が中心となり太
きくなったヴァレリア解放軍に多く、彼らの隠遁と
同時にウォルスタ人ががついていた通説も薄らいで
いった。

逆に貴族階級であったバクラム人は、戴冠後のベ
ルサリア女王の態度に不信感を抱いている。やり方
がブランド司祭と変わらないからだ。

特にヴァレリア騎士団を重用せず、何かことある
ごとに暗黒騎士団を用いるやり方はバクラム・ヴァ
レリア王国時代以上だった。

特にローデイス教国との同盟は、ヴァレリア王国
がローデイス教国の属国化につながるのでは、とい
う不安をもたらしていた。

しかし、当のベルサリア女王に進言できる者など
いないのもバクラム人らしい態度であった。

そしてベルサリア女王こと、カチュアもそれを見
越して暗黒騎士団との接触をこれ見よがしにしてみ
せるのだった。

唯一ベルサリア女王にとって有利だったのは多数

派であるガルガスタン人の厭戦気分だった。

最大多数のガルガスタン人はこれ以上の内戦を望
んでいなかった。それは自身の過激派を穏健派が完
全に封殺しているところからも分かっている。

ともかくこれ以上の戦争をガルガスタンは望んで
いない。もう十分だと思っているのだ。

それにベルサリア女王の平等政策は必然的に自分
たち多数派であるガルガスタンに利益をもたらすこ
とも分かっている。

支配階層がバクラム人であろうと、利益を甘受す
るのは常に多数派なのだ。それをドルガルア王の時
代に十分堪能しているのだから、それが継承されれ
ば何も問題はないのだ。

そのような情勢の中で、カチュアはベルサリア・
オヴェリス女王という役割をこなしていく。

それは決して難しいことではなかった。

何故ならもうカチュアは最大の目的を達成してい
たからだ。

後はそれが自分の手元に来れば、それでいいのだ。

○

ランスロット退出後すぐにカチュアは自室へ下
がった。既に執務は終わった。いや、自分の下に作っ
た民族部会が執務をこなしてくれる。自分はそれを
採決するだけでいいのだ。

既に自分のやるべきことは終わっている。

ロスローリアンたちがもたらした官僚システムの
お陰で楽をさせて貰っている。カチュアに必要なの
は霸王ドルガルアの印象である武力だけであり、そ
れはローデイス教国が貸し与えた軍事顧問・ロス

ローリアンがこなしてくれる。

カチュアがするべきことは一つも無い。

だから、カチュアは日課をする。

ドレスのまま自室に籠もり、ベッドの上に寝転が
る。

そして、すぐに手は股間に置かれ、ぐつとスカ
トごめり込まされる。

カチュアの口から甘ったるい言葉が溢れる。

「はあ……ああ……ああ……で、デニムう@」

カチュアにとって充実した時間が始まった。

ベルサリア・オヴェリスという名前にはまだ慣れ
ていない。だが、この行為は日課だ。

そして、今のベルサリア・オヴェリスという地位
のお陰で、この行為を咎める者は誰もいない。

つまり心ゆくまで肉欲に溺れることができるのだ。

「ふう……んっ！ で、デニムうっ！ は、早くうっ
……早くうっ、私の所にいっ！」

デニム。

自分の弟。

“ゴリアテの若き英雄”。

そして“バルマムツサの虐殺者”。

様々な顔を持つ優しい男。
カチュアが最も欲しているのは彼自身だった。
彼を想い自らの醜い欲望を充足する。

それが、カチュア・パウエル——デニム・パウエ
ルの姉なのだ。

「はあっ……んっ！ ふうっ……くうっ！ んんっ
……気持ちいい！ デニムう、分かる？ 分か
るう？ 私い、あなたを想いながらオナニーしてい
るんだよ？」

下着の下からくちゆくちゆといやらしい音が響いてくる。ぞくぞくとした興奮が自分の中に広がっていく。

そして、カチュアは下着を下ろす。
どろりと愛液が塊になって溢れ出る。

「んっ……くうっ！ ま、またあ、シートを汚してしまったわ。侍女たちが私のこと陰で何て言ってるか知ってる？ 手淫女王よ。そうよ、私い、あなたを想いながら何度も何度もオナニーしたのっ！」

カチュアは自分の陰部に指を差し込んだ。

更にぐちゆるうっ、といやらしい音を響かせて、愛液が噴き出す。

腰をビクビクと震わせてカチュアは興奮を噛み締めていく。

「はあっ……すっごいいっ！ いっぱいいっ、エッチな汁うっ出たあっ……ああっ！ これえ、気持ちいいいっ！ やっぱりこれえ、気持ちいいよっ！」

ベッドの上で腰を揺するカチュア。

パウエルの姓の頃では、絶対に眠ることを許されなかった豪奢なベッド。

その優しくもしっかりとした弾力はカチュアの激しいオナニーの動きを快楽に変える。

ベルサリア・オヴェリスというただの傀儡女王に許される富の使い方が自慰とは恐れ入る、とカチュアは皮肉に思っている。

「ふうっ……んんっ……あっ！ ああっ！ 凄いいっ！ 凄いいっ！ 気持ちいいいっ！ こんな

に気持ちいいのお、嬉しすぎるうっ！」

腰が勝手に動く。

ビクビクと痙攣させて、愛液が噴き出る。

その噴き出した愛液は、真新しいシートに吸い込まれ、いやらしい染みを作る。

その染みが広がるたび、カチュアは自分が汚れていくのを実感する。

そして、カチュア・パウエルが薄くなり、ベルサリア・オヴェリスが濃くなっていく。

できれば、デニムを、弟を愛するのはカチュアであって欲しかった。

だが、欲望を充足するためにはベルサリアという他人にならねばならなかった。

それがもどかく恨めしい。
それでも肉欲を充足できるとカチュアは我慢する。

そう、お楽しみはこれからだし、幾らでも挽回する方法はあるのだ。

「んんっ……ふうっ！ ううっ……あっ！ ああっ！ 凄いいっ、オマンコおっぎゆうっ、って動いたあっ！」

自分の性器がセックスの興奮で勝手に動くのをカチュアは身をもって体験し、それに感動する。

その感動で手の動きも激しくなり、じゅくじゅくと漏れ出ていた愛液は更なる量を増やし、指とシートを汚していく。

そして、溢れ出る愛液は更に指を滑らせて、自分の中へと誘っていくのだ。

「あっ！ ああっ！ 奥うっ！ 凄いいっ！ し、子

宮うっ、ここおっ、子宮うっ！ んんっ……これがあつ、気持ちいいのおっ！」

カチュアの指が自身の子宮を捉えた。

そのコリコリとした感触にカチュアは興奮を憶える。

自分にも女としての器官があり、それがいつか機能することになる。

しかも今はヴァレリア王国正統後継者ベルサリア・オヴェリスである。

いずれは世継ぎを身籠もり、この王国を続けていなくてはいけないのだ。

そしてその相手は——

「デニムっ！ デニムうっ！ んんっ……好きいっ！好きなのおっ！ あっ！ ああああっ！ くう……んんんっ！」

最愛の弟。
愛しているからこそ憎まれるようにする。

それが今のカチュアの愛し方だ。

仲間思いのデニムは、きつと仲間のために自分の身体を犠牲にするだろう。

それを想像するとカチュアはますます興奮する。

自分を責め立てるデニム。
自分をなじるデニム。

自分を蔑むデニム。
デニム。デニム。デニム。デニム。

「くう……はあっ！ はあああっ！ あああああああああっ！ ああああっ！ い、イグううっ！ デニムうっ、イツチャううううううううううううううううううっ！」

腰を高く上げ、ピクピクと股間を痙攣させて、愛液を噴き出すカチュア。

ビチャビチャと音を立てて濡れたシートに更に染みを広げていく。

これを見た侍女どもはどう思うだろう。笑うだろうか。笑うなら笑え。その口を引き裂いてやろう。神聖ゼテギネア帝国の女帝エンドラも青くなるほどの残酷さでだ。

これを笑うは、デニムへの愛を笑うも同然だからだ。

その妄想にカチュアはきゅっと唇を歪め、微笑んだ。

その妄想が終わるか終わらないか、扉がノックされる。

「陛下、ロスローリアンのマルティム様とバルバス様がお目通りを願っております」

「……そう。では、私が出向くと伝えなさい」

「陛下御自らですかっ！」

「そうです。彼らは大切な軍事顧問のメンバー。私が出向くのは当然でしょう」

「……は」

侍従の困惑した声を聞くのはいつでも楽しい。自分がランスロット・タルタロス以外の暗黒騎士にひれ伏すような姿を見ているのだ。

そうとも。事実カチュアはひれ伏している。

彼らはカチュアが欲しくて欲しくてたまらないモノを持っているのだから。

「来たか、カチュア。いやベルサリア女王様だったかな？」

「あまりからかうなよ、マルティム」

「くくく……これがからかわずにいられるかってんだ。テメエの弟が欲しくて俺たちにケツを振る女だぜ？」

暗黒騎士の中でも礼付きのワルであるマルティム・ノウマスとバルバス・ダド・グースと会う場所は決まってこの秘密の地下牢だ。

暗黒騎士団は何かを探してこのヴァレリア王国にやってきていた。特にこの王都ハイムを丹念に探し回り、ドルガルア王が作らせた秘密の地下牢を見つけたのだった。

今、そこは改装され、マルティムとバルバスに忠誠を誓っている暗黒騎士たちの溜まり場となっている。

そこには女や子供が奴隷のように扱われ、オモチャにされているのだ。

「そうよ。私は弟、デニムが欲しい。その代わりにあなたたちのいうことを聞いているわ」

「へっ、さすがは、霸王ドルガルアの娘だぜ。はつきりモノを言う」

「私からすれば、ローデイス教つても随分なものだと思っわね。この地下牢で作られた死体を見ると」

カチュアは黙って女の死体を見下ろす。

さつきまで温かかったのは床に広がる血の湯気を見れば分かる。

「おっと済まないな。俺の部下が壊したんで、俺がとどめを刺したただけなんだ。あんたに他意はねえよ、

女王様」

「それに弁護させてもらうが、俺たちローデイス教を信仰するローデイス人からすれば、異教徒がどうだろうと知ったことじゃないんだがね」

「そうだったわね」

教化と呼ばれる拡大政策を旨とした軍事国家であるローデイス教国の人間からすれば、ローデイス教ではない人間は人間でさえ無いだろう。

ましてや人間の底辺にいるようなこのふたりであれば、その思いを尚のこと強くするだろう。

自分たちさえよければいい、それがマルティムとバルバスという男なのだ。

「別に殺しても構わないわ。今も解放軍の残党狩りは続いている。その中の女を差し出した後は、どうとでもすればいい」

「おお、怖い怖い。さすがは、ベルサリア・オヴェリス女王様だぜ」

「……嫌ならいいのよ」

「ペッ！……そうだな、女はたつぷり楽しませて貰っているのは事実だ」

「ええ。自由にしていいいわ。あなたたちが残党狩りで捕虜にした連中も」

「ああ。存分に楽しませて貰うぜ」

人を殺すことが楽しくて仕方ないと言わんばかりにバルバスは凶悪な笑みを浮かべる。

カチュアはこのふたりと手を組んだ。ランスロット・タルタロスは人間としては信頼できるが、自らが言ったとおり、教皇の舌である以上利用はできない。

いかなる欲望も教皇サルディンの言葉に優先する

ことは無いのだ。

だが、このふたりは違う。

欲望に忠実だ。

そして、既にランスロット・タルタロスを裏切る腹づもりでもある。

「分かつてると思うが、カチュア。俺たちは一蓮托生だ。団長を裏切ることは、ローデイス教国を裏切るってことでもある」

「でも、ランスロット・タルタロスが死ねば？」

「……おいおい剣呑なことを言うなよ。死んだ責任が俺らにあるなら、ある意味事故だ。だが、あんなの国にあつたら？」

「大切な剣を折られた教皇様がどんな反応するかは予想が付くわね」

バクラム人が恐れているローデイス介入を招く危険性は高まる。ランスロット・タルタロスは教皇の右腕なのだから私怨でなかったとしても、十分考えられる。

「つまり、綺麗にご退場願えれば幸い。でなければ、あなたと俺たちがやろうとしていることが団長に知られなければいいんだ」

「そうね。いざとなれば秘宝を渡せばいいのだしね……」

「秘宝……ねえ。再度尋ねるが、カチュア。あなたは聞いたことも無いんだな、ドルガルア王の遺産ってのは」

「無いわ。私にとつて王は、父親でさえない。私にとつての父親はプランシー・パウエルだけよ」

「へっ。そうかい。家族ごっこが好きな女王様だ」
「……私への侮辱は許す。でも、家族への侮辱は許さ

ない」

「こえこええ。まあ、あなたの必要なのは俺たちが持っている。俺たちが欲しいものは、あなたが与えてくれる。それさえ確認取ればそれでいい」

「ええ……」

「さて、じゃあ“契約”の更新だ」

「……あなたたちが相手してくれるの？」

「そうしたのは山々だが、団長殿が俺たちを捜し回っている。団長には言い訳が立つが、パールゼフォンのおっさんに小言を言われるのは我慢できん」

「じゃあ、誰が？」

「俺たちの部下がやってくれる」

奥を見れば、女たちを弄んでいた血気盛んな男たちがにやけている。
コイツらが、ロスローリアンの鉄の規律を無視し、マルティムとバルバスに付いた奴ら、というわけか。そして、彼らを手なずけるための“餌”に自分が成り下がっているのだ。

「……あの子たち、分かつてるのでしょうか？」

「あなたの純潔を守れ、だろ。分かつてるさ。ローデイス教つてのは厳しく慎重深いもんだぜ？ 約束は守るさ。女との約束は」

「そう。是非そうして貰えると嬉しいわ」
「……残念だな、この柔かい胸にかみつけないのは」

バルバスはカチュアの胸をぐつと掴む。
粗野な殺人者の手の力は強く加減というものを知らない。

カチュアは痛みで顔を歪める。

「おっと、失礼。女王様のおっぱいとはいえ、他の女と感触が変わらないからつい思いつき切り絞っちゃったぜ」

「バルバス、やめろ」

「いいじゃねえか、マルティム」

「団長に言われたらことだぞ」

「……ちっ」

確かに。これは“非礼”だ。
あのランスロット・タルタロスが許すとは思えない。そして、この邪悪なふたりを相手にしてもランスロットは勝つほどの実力者なのもすぐに分かった。

「じゃあ、女王陛下。またな」

「今度は俺たちが楽しませてやるからな」

「ええ……楽しみにしているわよ」

心にもないこと——そう思うカチュアだが、身体の芯が熱くなるのを感じる。
すぐにでも男根を、ペニスを咥え込みたいと思っていた。

すぐに、マルティムとバルバスの部下が群がってきた。
どれも年の頃は、二十歳になったばかりか、それより若いか。

「……若いわね。みんな、成人したてかしら？」

「そうですね、女王様。女王様は成人されてますか？」

「私には成人という概念は無いわね。私は、私ですもの」

「そうですね。では、まだ未成熟な性器を舐めさせて



もらいますよ」

「ええ……舐めて頂戴。いっぱい、いっぱい、舐めて頂戴」

カチュアは足を開いた。
むつとする牝の臭気が暗黒騎士たちを刺激する。

「俺は、胸だっ！」

「待てよっ！俺が先だろっ！」

「落ち着きなさい。片方づつ愛してくれろ？」

血気盛んな若者だ。

あのふたりが捨て駒に使うにはこれぐらいの愚かさが必要なのだろう。

賢かったら寝首を搔かれる、マルティム辺りならそう考えるし、バルバスなら未熟なガキには負けな
い、と思っている。

それがまるつきり透けて見えるほど、この暗黒騎士たちは若く未熟だった。

デニムもそうだろうか？カチュアはそう思うと自分の股間がぐつと熱くなるのを感じる。それをめざとくクンニリングスしている騎士が気付く。

「女王様、凄く濡れましたね、今」

「ええ……そうよ。興奮しているの」

「じゃあ、こつちのおっぱいを責めたらどうなるのかなっ？」

「えっ……ああっ！はあっ！」

カチュアの身体に激しい興奮が広がっていく。

腰も股間もビクビクと震え、もつと激しい興奮を欲しがっている。

「どうだ？オマンコの方は？」

「凄いな、ピチヨピチヨと出てきたぞ」

「やっぱりな。女はこつちを責めると感じるんだぜ」

「でも、クリトリスに比べたらどうかかな？」

「だ、ダメっ……はあっ！ああっ！」

クンニリングスしていた暗黒騎士はいきなりクリトリスだけを舐め回す。

包皮を捲り、クリトリスそのものをびんと際だたせてからのクンニリングスだった。

カチュアの下半身に電気が一気に駆け抜けた。

「ふふふ……ほら、見ろ」

クンニリングスをしていた男は指をヴァギナをなぞる。すると溢れ出した愛液が塊となって男の指を汚していく。

カチュアがセックスの興奮に湧いている証だ。

「すげえ。早くセックスしたいぜ！」

「気を付けろ。マンコハメは無しだからな。マルティムさんとバルバスさんに殺されるぞ」

「別にいいじゃねえか。何だっつてオマンコ使わせてくれないんだ？」

「さあな。政略結婚に必要なのかもな」

「ローデイス教だっつて処女検査ぐらいするだろ？」

「俺は辺境の出身だから知らん。神都ガリウスだとそういう規律も厳しそうだな」

「名家だと専属のやり手ババアがいるぜ」

「けっ、そうまでして家つてのを守りたいかね？」

「少なくとも小国の女王陛下であるベルサラア様はそうなんだろうな」

カチュアは微笑む。

セックスと自分が男たちに立場のことで勝りものにされているという事実に興奮しているのだ。

この子たちがカチュアの真の目的を知ったらどんな顔をするだろう。

蔑むか？罵るか？恐怖に慌てるか？

まあ、いずれにしてもいい感情が表に出ることは無さそうだ。

それでもカチュアは目的を達成したいと思つている。そのために、祖国を売るまでやってのけたのだ。かつての仲間に賞金を掛けて追い立てているのだ。

絶対に自分は折れない。

ここで折れて何になる。

やっと自分の欲しいモノが見つかったのだから。

「さて……じゃあ、そろそろハメるための穴をほぐすか」

「へへ……ケツ穴か。悪くないよな」

「そんなに経験したわけでも無いのに、いいか悪いかなんて分かるのかよ」

「女王様のケツ穴だぜ？それを俺たちがハメ回していいっついうんだから、マルティムさんもバルバスさんもいい人だぜ」

「うふふ……いいわよ。早くハメて。私のケツ穴にい、ベルサラア・オヴェリスのケツ穴にハメて頂戴」

これ見よがしにカチュアは臀部を開き、アヌスを剥き出しにしてみせる。そのまま腰をくねらせ、挑発するのだった。

まだ若い騎士たちは我先にとペニスを押し付けてくる。残念ながら、アヌスには一本しか入らない。

火然的にあぶれた男は別の穴を求める。
ヴァギナを使えば殺される。となれば、残るは口しかない。

もうひとりとは仕方なしに、ヴァギナを舐めながら自らのペニスを慰めていく。

「くうう……凄いで。ベルサリア女王のケツ穴は凄く狭くてチンポが食いちぎられそうだ」

「ああ……こつちも気持ちいいぜ。口もしっかりこなしてくれているんだ」

「くそ。いいな。マルティムさんもバルバスさんもこれを楽しんでたのか……」

「そうよ……んっ！ ふう……そう。あのふたりは私の身体を楽しんでるわ。あなたたちも楽しむのよ。そう、すれば、あなたたちも権力に近づけるんだから……」

「権力？ 確かに力は欲しいけどさ……」

「ベルサリア女王に何ができるんですか？」

「そうね……あなたたちを取り立ててテンブルコモンドにしてもらうってのも悪くないわね」

男たちの動きが止まる。

だが、その反応は決して悪いものではない。

ただ、三人もいるからそうした反応になるのだろう。ひとりであれば、自分の野心を燃やすのは誰も咎めない。

カチュアは更に押しをかけた。

「オズ、オズマの姉弟の穴、埋まっていけないのではありません？」

「それは……」

「今の私ならマルティムであろうと、バルバスであろうと、そしてあなたたちの団長であろうと推挙でき

る位置にいるのよ」

「……」

男たちは黙る。
自分たちだつてこのままヒラの騎士で終わるつもりはない。

マルティムやバルバスが慰安のために自分たちに女王を渡したわけではないことも分かっている。

ただ、女王とセックスの相手をすればいいと思っていた。何故なら女王は女王という名の下僕だと教えられていたから。

だが事実は違う。

この人は自分たちの国と外交を結んでいる国家の首魁なのだ。そして、マルティムやバルバスと結んでいる裏の契約より、ランスロット・タルタロスやローティス教団と結んでいる表の契約の方が強いのは間違いない。

「うふふ……悩まなくていいわ。私を楽しませて。私の純潔をそのままに、私を楽しませてくれればいいのよ」

「お、おう……」

「そうだな……女王陛下の話は、これが終わってからにしようぜ」

「ああ。分かった」

男たちはやっと身体を動かした。

自分の身体に火が再び入るのをカチュアは喜んで受け入れた。

男のペニスが自分のアヌスを、直腸を犯していく。その感触にカチュアは震える。

興奮を噛み締め、それをじっくりと感じる。そして、客観視する。

すると、自分のはしたなくみつともないことをしている実感できる。

その下卑た状況が、ますます自分をみつともないものだと思わせ、その落ちぶれた感覚がまた興奮を呼び起こすのだ。

「くううう……はあっ！ あああっ！ お、お尻いつ、凄いつ、気持ちいいいつ！ 凄いつ……オチンチンんっ、固いつ！」

「へへへ……女王様は、この固いつチンポがお好きですか？」

「す、好きいつ！ 固いつチンポ好きいつ！ あああっ！ あああっ！ 素敵いつ！ ゴリゴリいつてるうっ！」

「あのふたりよりも具合がいいでしょ？ 俺らは若いですからねっ」

「はあっ！ んっ……そお、そうよおっ、若いのおっ、好きいつ！ 気持ちいいいつ！」

「ああ……凄いで、女王様」

「ふふふ……オマンコの方も凄いつ感じ方ですよ……たまらないな。本当に高貴な血筋なのですかね？」

「そんなわけ……ないでしょお？ 私の実の母は王に股を開くような下女ではない下女よ？ 私の身体にも淫乱の血は流れているわ」

こいつらを楽しませるために言った台詞だが、その通りだとカチュアは思った。

そして、その蔑まれた中でアナルセックスに興じている自分に恐ろしいほどの興奮が感じられているのもまた確かだった。

自分が如何にはしたなくいやらしい牝であるか、カチュアは実感せずにはいられないのだった。

「来ましたか、ランスロット・タルタロス」
「どういとおつもりです」

もう既に移送は終わった。

如何にロスローリアンの団長といえども、手出しはできない。その辺りはマルティムとバルバスのサポータージユのお陰で、上手く行った。

「どういとおつもりか、と言いますと？」

「とぼけないでいただきますよ。あなたの弟、デニム・パウエル君のことですよ」

「それが？」

「彼は我らローティス教国の騎士を何人も殺害したものです。本来は我らの手にあつた。それをあなたが引き取ったというではありませんか」

「そう、なりますわね。ランスロット・タルタロスの中では」

「私の中では、とは面妖なことを」

カチュアは意地悪い笑みを浮かべた。

ランスロットにとってそれは慣れない者の笑いだった。

「ロスローリアンの団長ともあろう人が、自分の部下たちが行っていたことを見逃しているとは思いませんでしたわ」

「……我らには暗部がある。それはあなたもご存じだ。それを履行している間、テンプルコマンドは自由に振る舞うことを許している。デニム君のことは、その中でなされたことだ」

「それで？ 私はあなたの騎士と単に契約をもって我が国の犯罪者の引き渡しをお願いしただけに過ぎませんわ」

「……契約？」

「ええ。我が国での外交使節としての優待、それを望みでしたので」

「勝手な真似を！」

「確かに。団長であるあなたに断るべきでしたわ。ですが、あなたはさっきこう仰いました。暗部で活動している間、テンプルコマンドは自由に振る舞え、と。あなたにとつても部下の勝手が便利になったのはいいことなのでは？」

「……」

ランスロットはカチュアを睨む。

「たつた一つしか残っていない目は酷く強い光を放っている。」

だが、今のカチュアには何も感じられない。何故ならデニムはカチュアの手の中にあるのだから。

「で、あなたはさっき自分の部下の死に関して、我が国民にして大逆者デニム・パウエルが関与していると仰いましたね？」

「そうだ」

「彼が大逆者であることには変わりありません。我が国、ウォルスタ王国分裂を目論んだ彼に極刑を与えるは必定です」

「……ほお」

ランスロットは目を見開いた。

「こたわっていた男を得たというのに極刑とは。」

ランスロットは更に尋ねる。

「どうなさるのですかな？」

「生かしたまま何度も殺します。幸い魔法に事欠いていませんからね、私は」

「……」

ランスロットは一瞬でも自分がこの女に期待したことを後悔した。

この女は自分の弟を殺したりはしない。そう、元々女というのはそういうものなのだ。

だが、デニムが死ぬより酷い目に遭うことは間違いない。今はそれで溜飲を下げるしかない。

己と同じ名前のゼノビアの聖騎士を討った時のような感動も快楽もランスロット・タルタロスには与えられないということだ。

「……では、きつちりとした罰がデニム君に与えられると信じていいのですね」

「それは勿論」

カチュアは強く頷く。

「そうとも。姉であり、最愛の人である自分を捨てた弟にきつちりとした罰を与えるのは当然であり決定なのだ。」

「いいでしょう、女王ベルサリア・オヴェリス陛下。あなたの言葉を信じます。元々あなたの国の問題ですからね」

「分かっていただけで嬉しいわ。ランスロット・タルタロス」

「私は本件以外にも本国で報告しなくてはいけないことがありますが、ヴォラックと二週間ほどここを離れます。後のことはパールゼフォンに任せます。何かありましたらパールゼフォンに願います」

「はい」
わざわざ後継を指名していくことは、マル

タイムやバルバスの謀叛の動きは悟られているということだろうか。

「だったらそれはそれで構わない。」

「何故ならカチュアにとって必要なものはもう手に入っている。」

「自分とマルティム、バルバスを分断されようと思ったことではないのだ。」

「では、お気を付けて。ランスロット・タルタロス」「あなたも。ベルサリア・オヴェリス女王陛下」

○

ランスロット・タルタロスがいなくなり、カチュアは自分の部屋へと戻る。

そこでは拷問用の椅子に縛られた愛する弟が座っているのだ。

「……姉さん」

「デニム……私をまだ姉さんと呼んでくれるのね」

「どうして、どうして、姉さんは女王になったんだ？」

「それが本当に幸せなのかい！」

「幸せ？ 私はやつと幸せを手に入れたのよ」

「これが幸せなの？ ベルサリア・オヴェリスという仮面を被っているのが？」

「そんなのはどうでもいいわ」

「ど、どうでもいいって……」

「私にとってヴァレリアがどうなるかと知ったことじゃない。そして、他の人たちも同様よ」

「姉さん……どうしてしまったんだ。優しい姉さんは何処へいったんだ？ ローデイスの連中が姉さんに何かしたのか？」

「何も……何もしてないわ」

そこで少しカチュアは口を閉ざす。

弟を見ていると自分の中の黒い欲望が押さえきれなくなっているのが感じるのだ。

「いいえ。何もしてないというのは嘘ね。私に力を与えてくれたわ」

「力？」

「そうよ。カ……ただ思っているだけで何もしないのは、最低。せめてそれを乗り越えるぐらいの力は無いといけない」

「それが、ベルサリア・オヴェリスになった理由なのかい！」

「ええ。そう。私が乗り越えるために必要だった最低レベルの力は、霸王ドルガルの娘であることを私の中に入れることだったの」

「……姉さん」

「デニム。私はあなたを愛している。そして、これからもずっと愛している」

「姉さんは、おかしい。おかしくなってしまったんだ」

「おかしくなったのはずっと前からよ、デニム」

カチュアはデニムを無理矢理立たせる。拷問のために拘束されている身体が利かないデニムはカチュアの言いなりになるしかない。

ベッドに横たえられ、デニムは覚悟を決めた。

「僕は『ゴリアテの英雄』、そして『バルマムツサの虐殺者』。国賊であるヴァレリア解放軍のリーダー、デニム・パウエルだっ！」

「そう。そして、私の大切な弟」

「さあ、殺せ！ ベルサリア・オヴェリスっ！ お前

もまた霸王の娘と同じく血を流すのだっ！」

「……どうしてそんな口を利くのデニム。私が自分の大切な寝所をあなたの血で汚すとも思っただの？」

「だったら、何をやるんだっ！」

「こうするのよ」

カチュアはデニムの下半身の戒めを解く。そして、デニムのペニスを引っ張り出す。

「ね、姉さんっ！ 何をっ！」

「ふふふ……こうしたかった。私い、こうしたかったの。あなたと女と男として愛し合いたかったのよっ」

「ば、馬鹿なことを！ やめるんだっ、姉さんっ！」

「うふふ……凄い臭うわ。捕らえられてからお風呂に入れてもらえなかったのね。いいわ、私が綺麗にしてあげる」

「や、やめてっ、姉さんっ！」

デニムの制止は無視され、カチュアはデニムのペニスを咥え込む。

じゅるじゅると吸われる感触に、デニムは思わず興奮を感じ、一気に勃起させてしまう。

「あああっ！ 凄いい……うふふっ！ こんなに大きくなってしまうのね。私の知らないうちにデニムは男になつてるう……」

「や、やめろっ、姉さんっ！ こんな、間違ってるっ！」

「まだ、私を姉さんと呼んでくれるのね。私はただの獣に成り下がろうというのに……嬉しいわ」

「姉さんは姉さんじゃないか。だから止めるんだっ！」

「ダメよ」



カチュアはフェラチオで溜めた唾液をデニムのペニスに滴らせ、ずるずると濡らしてく。

そして、ペニスに跨ると一気に自分のヴァギナに押し込んでいった。

「くぅ……はああっ！ ね、姉さんっ！」

「あっ……い、痛いっ！ 固くてえっ大きくてえ太いからあっ、オマンコ痛くなるうっ！ あっ！ ああっ！ は、入るうっ！ 入るよっ！」

「だ、ダメっ！ ね、姉さんっ！ くぅ……はあああああああっ！」

ずじゆり、と湿った感触と共に、デニムのペニスはカチュアの中に埋没した。

みちりと肉が裂ける感触にカチュアは顔をしかめたが、すぐに快楽に変えていった。

そう、自分の中には弟の、デニムの性器が埋没しているのだ。

これを喜ばずして、気持ちいいと思わずして何を思えばいいといいというのか。

「ね、姉さん……な、何で、何で血が……」

「あら、知らなかった？ 私はまだ処女よ。みつともないでしょう？」

「ど、どうして？」

「決まっているわ。あなたを犯すまでずっと我慢していたからよ。もつとも、後ろの穴はそれこそたくさんの男たちに舐られているけど」

「ね、姉さん……」

「セックスの快楽を憶えなかったら、あなたを犯した時楽しめないって思ってたからよ」

「何が？ 愛している人のモノをこんな風に愛するのが間違っているの？ フィーハラ神だっって許してくれるわ！」

「そんなことは、無いっ！ それに、僕の手も姉さんの手も血に汚れすぎている！ それで幸せになろうなんて——」

「知った風な口を利かないで！」

「ね、姉さん……」

カチュアは唇を噛み締めた。

カチュアからすれば弟の行っていることは正しい。だが、もしデニムが戦いを止めてただふたりで暮らしてくれたらこんな風にはならなかったと考えている。

その場合は、自分も別の男を探し、デニムを諦めよう。

しかし、デニムはそうではない道を選んだ。その段階では戦いの中でも自分の幸せは探せるはずだと思っていた。

事実は違った。デニムは他の人たちから必要とされ、カチュアが必要なデニムはどんどん小さくなっていった。

それは母代わりに育ててきたカチュアにとって許せないことだった。

カチュアよりも大事なものがあんなんで、自分にはデニム以外に大事なものなど無いというのに。

「大切なデニム……もう離さない。あなたの望んだ平和はここにある。もう誰も困ることはない。そして、誰も死なない」

「ね、姉さん……姉さんは、僕を取り戻すために……ローデイスと手を組んだというのか」

「他にどんな手段があったの？ 今の私ならなんだっ

てできるのよっ」

「それは……間違っているよ、姉さん」

「うるさいっ！ 今は私が勝利者！ 私が女王よっ！ あなたの意見は聞きたくないわっ！」

そう叫びカチュアはデニムの上で腰を使う。破瓜を迎えたばかりのヴァギナだったが、これまでのセックスで感覚はこなれてきた。

見る間に愛液が溢れ、ジュークジュークと股間が濡れそぼっていく。

デニムにも激しい快楽が立ち上ってくる。思わず声が漏れるのもしかたないことだった。

「くぅ……はああっ！ ね、姉さん……だ、ダメだ……ぼ、僕は……僕は……」

「我慢しなくていいわ。んっ……わ、私もお、気持ちいいんだから……あなたの、オチンチンでえ、私い、感じてるんだからあっ！」

「ね、姉さんっ……ああっ！ あああっ！」

デニムはカチュアの中でたたかに精を漏らしていた。

だが姉に射精するなどという背徳的なことをデニムは甘受できなかった。

カチュアはそれを妻まじく望んでいるというのに。

「どうしたの、デニム？ いいのよ。思いつ切り中に出して……さあ、私に種付けしてご覧なさい」

「だ、ダメだっ！ ね、姉さんっ！ 姉さんはおかしいっ！ こんなのは間違っているっ！」

「そうね、間違っているわ。ゴリアテがローデイスの暗黒騎士たちに襲われた時、生き残ったのが間違いなだけだから」

ンブルコマンドをふたりも失っている。

しかし、この辺境に残って「穏便に」状況を支えるにはマルチムとバルバスは不要だった。

「だが、よく分からん。何故ベルサリア女王は動かん。マルチムとバルバスに繋がってるのは確かだ。あのふたりを隔離すれば何か起こすと思っただが……」

パールゼフォンは政治に長けている。元老院議員であった父を裏切り、弟を切り伏せた惨憺な脳細胞も、カチュアの真の目的を掴みかねていた。

既に真の目的は達成しているのだが。

○

「さあ、デニム……寝美の時間ですよ」

「お姉ちゃんのお……寝美……好きっ！」

デニムは身体を縛り上げられ、身動きが取れない状態だった。

しかし、デニムは這い回りながら玉座へと突き進む。

そして、足を広げたカチュアの股間に顔を埋め、たっぷりとクンニリングスさせる。

デニムは丹念に姉のヴァギナを舐め回し、カチュアは弟の舌の動きを堪能しているのだ。

「うふふ……上手ねえ、デニムは」

「うん、僕上手だよ」

「そうね、お姉ちゃんのおマンコは美味しい？」

「うんっ、美味しいよっ」

「そう。良かったわねえ」

カチュアは満足げに微笑む。

だが、心のどこかではこれが間違った結果だと警告を発している。

こんなデニムを欲しかったわけじゃないと。

しかし、結果はこれだ。もう後戻りはできない。

賽は振られ、剣は振り下ろされた。死んだ人間は生き返らない。

そして、カチュアはデニムの心を壊してしまった。

快楽と近親相姦という重い罪で。

「でもいいのよ、デニム。お姉ちゃんはあなたのことをずつとずつと愛してあげますからね」

「うんっ！ お姉ちゃん、大好きっ！」

「じゃあ、もつとオマンコ舐めて。そしたら、またオチンチン使ってあげるわねえ」

「使つてえっ！ 使つてお姉ちゃんっ！」

「まだダメよ。ちゃんとお姉ちゃんのおマンコを楽しませてからね」

「うんっ。楽しませるよっ！」

そうしてデニムはカチュアのヴァギナに顔を埋め、

びちゃびちゃと舐め回す。

その音にもカチュアは興奮して身体を震わせる。

「そうよ。そこを吸いなさい。そうそう。んっ……気持ちいいわっ。はあ……んっ……くふうっ！ んっ……もつと、強く」

「ちゅっ……りゅう！ ちゅっ……ちゅばあっ！

れろれろれろ……ちゅっ……はむっ、

りゅう、るちゅくちゅっ……じゅるうっ」

「ああ……いいっ！ いいわあ、んっ……本当

に、気持ちいいっ！ もつともつと舐め回し

てえっ！」

「うんっ！」

デニムは唇を器用に使い、カチュアの陰唇を開いていく。

奥からはどろりどろりと白く濁った本気汁が溢れ、

デニムの顔を汚していく。

そうして漏れ出た粘液を気にすることなくデニム

はびちゃびちゃと愛液を舐め取っていくのだ。

デニムの献身的な口淫にカチュアはますます愛おしさを感じていく。

「ああ……可愛いデニム。もつともつといやらしいことをしてたいわ。私の大切なデニム……」

「お姉ちゃん、好き……大好きい」

「そう。もつと言つて。もつと愛して」

「お姉ちゃん、愛してる」

壊れたオルゴールのようにデニムはカチュアを愛し続ける。

端から見れば狂人と狂人の愛情ごっこにしか見えない。

だが、カチュアはデニムが狂ったわけではないと知っている。

「んっ……デニム。ほら、イカせて。クリトリスを舐めて、イカせてえっ！」

「お姉ちゃんっ……イカせるうっ！」

「そうっ……さあっ！ イカせなさいっ！」

ピチャピチャと舐めていたデニムの唇と舌が激しく動き回る。

クリトリスを徹底的に責められかカチュアは歓喜



の声を上げて責めを受け入れる。

やがて、下半身全部がドロドロに濡れるような感
触が広がり、そして――

「んひひひひひひっ！ い、イグううううううううっ！
んんっ、イグううううううううううううううっ！ ふう
ううひひひひひひひひっ！」

――ぶちゆうっ……ぶしゃああああああああああ
ああああああああああああああ……しゃあああ
ああああああああああ……

カチュアは失禁した。

デニムは口でカチュアの尿を受け止め、それをゴ
クゴクと飲み干していく。

カチュアもまたデニムの頭を押さえ、尿を全て飲
ませようとしているかのようだった。

「ううう……ふう……はあっ、はあ、はあっ……んっ
……デニムう、よくできました」

「うん。僕よくできたよ」

「ええ……あなたは大切な弟ですからね。もつともつ
と大切にしなくちゃいけないわ」

「うん。お姉ちゃんに大切にされるんだ」

「さあ、いつものようにオチンチンを愛してあげる
わ。ここに座りさい」

「うんっ！」

デニムを玉座に座らせ、カチュアは後ろから置か
される格好になる。

ここにきてデニムの拘束具が外され自由となる。

そのままカチュアの下半身を太い腕が捕らえ、デ
ニムの怒張しきつたペニスがカチュアの中へと埋没

していく。

カチュアは悲鳴を上げて興奮する。

「はあああっ！ あああっ！ 凄いつ！ 凄いつ！
デニムのオチンチン、固くてえっ、大きくてえっ、
ステキよおっ！」

「お、お姉ちゃんのおマンコお、凄いや。いつもより
もびつくんびつくんしてるうっ！ 凄いや気持ちい
いっ！」

「そうでしょお？ お姉ちゃんのおマンコはデニムの
ためにあつらえたオマンコなのよ。デニム専用のエ
ロ穴になるのよお」

「うんっ！ これえ、僕専用の穴なんだねえっ！ あ
あっ……だから、こんなに気持ちいいんだあ！」

「そうよ。デニムの穴なのよ……ほら」
カチュアはペニスをすべて飲み込んだ状態で、グ
リグリと腰を動かす。

そうするとデニムはかぶりを振りながら興奮をし
てみせる。

「はあああっ！ ああああああっ！ お、お姉ちゃ
んっ！ お姉ちゃんっ！ お、オチンチン……取れ
ちやううっ！」

「取れちやうの？ オチンチン取れちやうの？ それ
は困るなあ、お姉ちゃんデニムのオチンチン大好き
だからねえ……うふふ」

「うう……意地悪だあ。意地悪だよお。あっ……ああ
あっ……気持ちいいっ。オチンチン気持ちよくな
るうっ……」

「ゆっくり動かせば気持ちいいでしょ？ ほら、オチ
ンチンがびつくんびつくんするよ」
「はあっ……ああああっ……お、お姉ちゃんっ、お姉

ちゃん大好きいっ！」

カチュアの身体を強く強く抱きしめるデニム。

その強さは子供のようになしやべり方からは想像が
できないほど強く、そして遅い。

カチュアにとってはそれがとても心地いいものにな
っていた。

「ああ……デニム、ステキよ。もつと抱きしめて」
「うん、お姉ちゃん！ 抱きしめるの好きい！」
「いい子ね、デニムは。さあ、お姉ちゃんを楽しませ
て頂戴！」

デニムはカチュアの身体を大きく揺さぶる。その
たびに膣から引き出されるデニムのペニスが激しい
興奮をもたらしてくれるのだ。

カリの大きいところが粘膜を引きずり出し、それ
と共に大量の愛液が溢れ出てくるのだ。

その感触はカチュアにもデニムにも、凄まじい快
楽を与えてくれる。

その快楽に従い、デニムはピッチを上げた。
粘膜の擦過と愛液の噴出が激しさを増す。

「あああああああっ！ ひあああああああっ！ い、
いいっ！ 気持ちいいっ！ 気持ちいいよおっ、
デニムううっ！」

「お姉ちゃんっ！ お姉ちゃんっ！ お姉ちゃんっ！
あああっ！ あああっ！ な、何かあっ、何かあっ、
で、出るうっ！ 出ちゃううううっ！」

「出してっ！ 出して頂戴いっ！ デニムうっ！ ん
んんんはああああああああっ！ い、イグううう
ううううううっ！」

■ おくづけ ■

発行：GRANDCROSS

著者：亀井&八叉かがみ

<http://grand-cross.web2.jp/>

2010年4月29日発行

印刷：BRO' S

Ca

古の昔

ice

カコエがすべてであり
鋼の教えと
闇を司る魔が支配する
ゼテギネアと呼ばれる
時代があつた。

OVER THE SAGA

